

雁塔聖教序の位置関係における一考察

荒 金 信 治

目 次

序 章

第一章 雁塔聖教序の配置に関するこれまでの見解

第一節 相反する二つの配置

(A) 足立喜六氏の記録(西→序碑、東→序記碑)

(B) 關野 貞氏の記録(東→序碑、西→序記碑)

〈両氏の比較〉

〈落書きが意味すること〉

第二節 雁塔聖教序の配置に関する三分類

第一款 正しい両碑の配置を示す解説書群

第二款 現在の配置と異なる見解の解説書群

第三款 両碑の配置に関して曖昧なる表現の解説書群

第二章 雁塔聖教序の正しい配置表示よりくる諸問題

第一節 位置や方向における順位の問題

△「左右」「東西南北」より考える

第二節 高宗皇帝が向いた方向

○仮説(一)

〈高宗皇帝が大雁塔に向って立つとしてみた場合〉

○仮説(二)

〈高宗皇帝が大雁塔を背に宮殿と同じ向きに向って立つとしてみた場合〉

○仮説(一)(二)のまとめ

第三節 碑面の上において見られる問題

第一款 褚遂良の名前が位置する問題

第二款 両碑の文字の大きさの問題

まとめ

關野貞博士の著書『支那の建築と藝術』の「支那碑碣の様式」(編纂昭和13年7月)頁一八八に『東に聖教序碑、西に聖教序記碑を立て、』とある。

実はこれが実際の両碑の配置と違うのである。(注1)

両碑を見ての帰国後、管見の範囲であるが「雁塔聖教序」の配置による資料を見てみると次の三つに分類された。

1. 西に聖教序碑、東に聖教序記碑の配置表現
2. 東に聖教序碑、西に聖教序記碑の配置表現
3. 曖昧な配置表現

である。

実際に見学したことが不安になり、別府大学の書道教室から西安の大雁塔へ、電話で次の内容について質問をしたのである。(注2)

○両碑の配置について

○両碑の保存状況と両碑の配置換えは可能であるのか。

○両碑の上にて拓本を取られた拓本の移動はないか。

その電話での回答は

○両碑の配置は「西側に聖教序碑、東側に聖教序記碑」。

○両碑とも深く埋めこまれており、動かせる状態ではない。

○両碑とも最高の文物品であり、簡単に動かせたととしても「両碑を移動することは許可が出ない。移動に関しては不可能である。」

高宗の時、現在の場所に両碑が定まってより両碑の配置換えはない。

○両碑の上にて取られた拓本を張り替えることはない。であった。

この様なことがあって、改めて過去旅行した時の西安訪問ノート(注3)を見ると、そこには正しい配置表示を記録していた。それなのに大学生の時の書道史の授業以来今日まで私自身關野博士が記した配置表示を知識としていたので実に恥しい思いだった。

「両碑の配置に関する問題は実見によって一応の解決をみる。しかし、なぜ有名な書物が違った両碑の配置を示しているのか、又その源流はどこにあるのか。解説書に書かれている「左・右」「東・西・南・北」の優劣と、それにかかわる両皇帝の比重問題。両碑の配置決定における高宗皇帝の立つ位置の問題へと新たな疑問が出てくる。

「どうして?」「なぜ?」と考え始めたことが、この小論への切っ掛けとなった。

この小論を進めるために、まず雁塔聖教序の両碑について説明を加えることにする。「第一章 雁塔聖教序の配置に関するこれまでの見解」では、正しい配置、違った配置、曖昧な配置表示に関する著書の紹介と説明をする。「第二章 雁塔聖教序の配置からくる諸問題」では、方向における順位の問題を中心に、高宗が大雁塔に向って立ったか、背にしたかの仮説も立て、褚遂良の名前の位置や両碑の文

字の大きさからくる問題にも触れてみたい。
それでは雁塔聖教序について説明をする。

〈雁塔聖教序の姿について〉

大雁塔のある慈恩寺の伽藍配置は唐代の宮殿と同じ様式で北から南を向いている。

大雁塔は七層から出来た塔で、その一層ずつ四方・東西南北の中央に入口を有している。その一層目の南門を挟む形で左右対象に存在する二碑を雁塔聖教序という。二碑はほぼ南門と同じ大きさの窟の中に埋めこまれている。両碑ともかろうじて碑面が出ていると言った具合である。

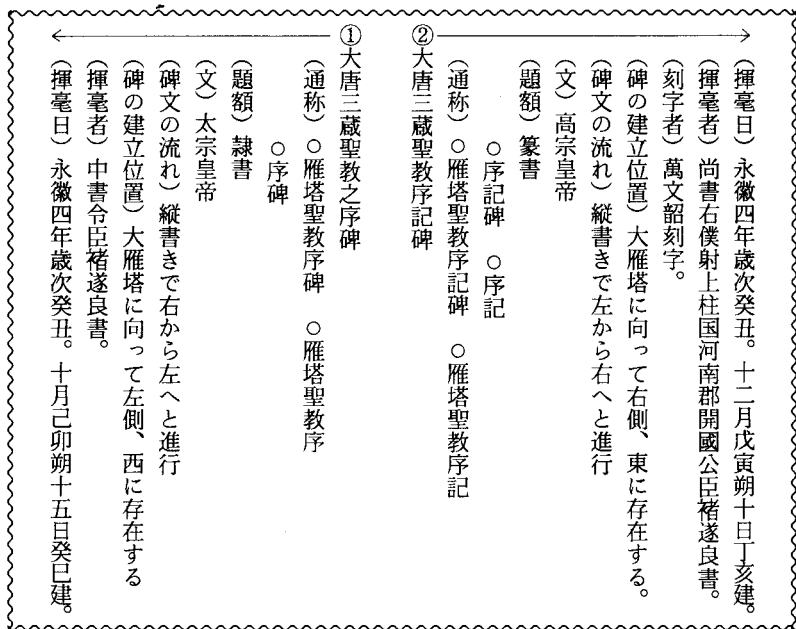
資料1の様に「西側に①序碑。東側に②序記碑。」と配置されている。

この二碑を理解しやすくするために、①②に分けた。

①の説明を碑文同様に右から左へと進行させ、②の説明も碑文同様に左から右へと進行させた。

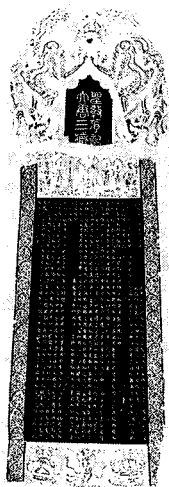
それが次の表である。

又、資料1と資料2は第一章での重要な資料となるので次に記載した。



A. 正しい両碑の配置を示す配列

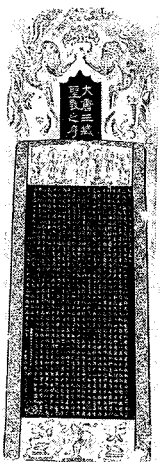
②雁塔聖教序（大唐三藏聖教序記）



東側

(序碑)

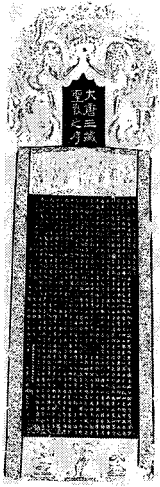
①雁塔聖教序（大唐三藏聖教之序）



東側

B. 現在の配置と異なる見解の両碑の配列

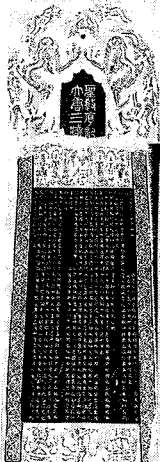
①雁塔聖教序（大唐三藏聖教之序）



西側

(資料1)

②雁塔聖教序（大唐三藏聖教序記）



西側

(資料2)

※→印は碑文の進行を示している。

第一章 雁塔聖教序の配置に関するこれまでの見解

では次に、雁塔聖教序の配置に関するこれまでの見解を概観しておこう。

雁塔聖教序の配置における説明、解説書を見比べると次の三つの群に分類出来る。

1. 西側、序碑。東側、序記碑を示す配置群
 2. 東側、序碑。西側、序記碑を示す配置群
 3. 両碑の配置において示す曖昧なる表現の群
- まず三項目の内1. 2. における最も古い両氏の配置表示を比較してみる。

第一節 相反する二つの配置

(A) 足立喜六氏の記録(西―序碑、東―序記碑)

(B) 關野 貞氏の記録(東―序碑、西―序記碑)

(A)(B)は1. 2. における両碑の配置表示において最も古い記録を残している。

(A) 足立喜六氏の記録

足立喜六氏の長安史蹟の研究二(発行所東洋文庫・発行日昭和8年12月25日)には次の様に記している。(注4)

両碑の位置が途中で移動されたものかどうかについては

「二 慈恩寺塔の建立」の内にて

前面の両龕にある聖教序及び記の両碑は全然異動した

る形跡を認めざれば、創建以来塔の上層には可なり変改があった様だが、其の基礎及び下層は少しも変化して居らぬことが知らるゝのである。

と述べ、建立の当初から動いてないことを断言している。更に今問題にしている両碑の位置については、

「八 聖教序碑及び同序記碑」

其の三は大雁塔の南門の左右の龕に嵌められた石碑である。向つて左の龕には永徽四年(西紀六六三)十月申書令臣褚遂良書とある太宗御製の三藏聖教序碑、右龕には永徽四年癸巳十二月十日に建てた「尚書僕射上柱國河南郡開國公臣褚遂良書」と署した高宗御製の三藏聖教序碑が嵌められて居る。右龕の碑は左碑と相對する為に左行から順次右行に読む様に書いてある。(以下略)と述べている。

更に同氏は同著書において、資料3・4で見られる写真も記載している。

(B) 關野 貞氏の記録

一方、關野博士は支那の建築と藝術(支那碑碣の様式)(編纂昭和13年7月・出版社岩波書店)において次のように説明している。

両碑の位置については

一八八ページにて

(前略)

此時初層南面入口の左右に各廣さ四尺八寸四分、深さ九尺二寸の小室を設け、其後壁に沿ひて東に聖教序碑、西に聖教序記碑を立て、其前に門扉を設けたのであるが今は唯蹴放石を存するのみである。(以下略)

と傍点筆写の部分で述べている。
更に同氏は(再版)中国文化史蹟(旧版)支那文化史蹟(發行所法藏館・刊行(旧版)昭和14年、16年頃。(再版)(昭和51年7月10日)において(資料5・6・7)も碑の写真の下部に横に二行で両碑の配置表示を注記している。

次に両氏の比較を簡單に行ない、両氏のまとめをして表示する。

〈両氏の比較〉

<p>訪中の年の年一九〇六年(明治39年)一月〜一九一〇年(明治43年)二月</p> <p>尚、長安史蹟の研究(二)のP9小引一に支那西安府陝西高等学堂に教鞭を執る傍ら：(注6)</p>	<p>(A) 足立喜六氏</p>
<p>※上記より 一九一〇年(明治43年)以前</p> <p>※一九〇八年(明治41年)以前(足立氏の写真より古い撮影)講演や執筆の記録より</p>	<p>(B) 關野貞氏</p>

A

大慈恩寺大雁塔大唐三藏聖教序碑



序碑 西(左)

(資料4)

A

(A)長安史蹟の研究 足立喜六著より

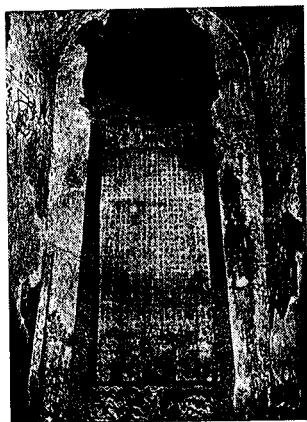
大慈恩寺大雁塔大唐三藏聖教序記碑



序記碑 東(右)

(資料3)

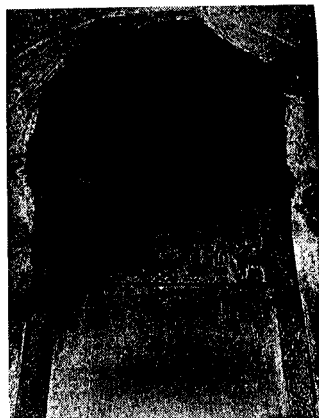
写真の比較	著書の作成方法	著書名
<p>○序記碑の落書き部分に春? 秦? 王がある。他に見られる落書きは両者同じである。</p>	<p>○自分の足で歩き自分で実測して、著書したもの。 (P9小引(一)を参照) ○写真有り。 ○両碑を一つ一つ写している。</p>	<p>長安史蹟の研究一 (発行昭和8年12月25日)</p>
<p>○序記碑の落書き部分に上記の落書きのみない。他の落書きは両者同じである。 普通写真の撮影はBが古いことになる。</p>	<p>(イ)は写真版のみで、説明は写真の下に一行か二行あるのみ。 両碑が写っている写真はない。 両碑を一つ一つ写している。</p>	<p>(イ)支那の建築と芸術 (編纂昭和13年7月) (ロ)支那文化史蹟 (旧版発行昭和14年(16年頃))</p>



B

大慈恩寺大雁塔大唐三藏聖教序記碑

序記碑
(資料6)



B

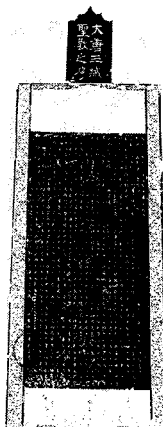
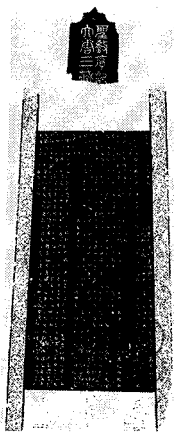
大慈恩寺大雁塔大唐三藏聖教序碑

(ロ)中国文化史蹟 關野 貞著より

序碑
(資料5)

慈恩寺 大雁塔 (1)大唐三藏聖教序碑(右)
(2)大唐三藏聖教序記碑(左)

記事	両碑の配置説明	両碑の解説について	
P 209 向って左の龕には永徽四年（西紀六六三）十月中書令臣褚遂良書とある	「向って左の龕には聖教序碑、右龕には序記碑」の最も古いもの	P 209 の「永徽四年（西紀六六三）は六五三の過ちである。これは単なる再版の時の誤植であって、本書の性格を左右するものではない。	P の波線部分にて聖教序及び序記碑の移動していないことの記述を見る。 P 209 の「嵌められた石碑」の表現は自分の目で見て現場を見ていないと使えることではない。
(イ)にはP 188の14行目に東に聖教序碑、西に聖教序記碑を立て：	「東に聖教序碑、西に聖教序記碑」の最も古いもの。故に過った記録として最も古いものとなる。	現場での表現がされていない	



慈恩寺 大雁塔 (1)大唐三蔵聖教序碑 拓本 (右)
 (2)大唐三蔵聖教序記碑 拓本 (左)

(資料 7)

<p>す る太宗御製の三蔵聖教序 碑、右龕には永徽四年癸 巳十二月十日に建てた 「尚書僕射上柱国河南郡 開國公臣褚遂良書」と署 した高宗御製の三蔵聖教 序碑が嵌られて居る。 ※但し、この年号はまちがい で正しくは六五三年である。 これは単なる印刷ミスとみ られる。</p>	<p>(回)には、図版(写真版) の下にP 53大唐三蔵聖教 序碑(右)、P 54大唐三蔵 聖教序記碑(左)とある だけである。</p>
--	--

これが両氏の比較である。

表から帰納される結論をのべると、実在の両碑の配置から見て關野貞氏が誤解していることはあきらかである。前述した「支那の建築と藝術」の西遊雜信下(P 789、P 790)の中で

本編は其の最初に誌されたる通り、大正八年三月十四日孟買日本人倶楽部に於て講演せられし者を渡欧の途中因幡丸船室内にて補修し、建築雜誌第三四輯第四〇〇号(大正九年四月)に掲載せられし者にして、其後一部に訂正を加へてアルス出版の美術講座中に転載せられた。其の巻頭に次の如く誌されてゐる。

此の稿は去る大正八年三月孟買日本人倶楽部に於て講演

せし者を渡欧の途上因幡丸船室内にて更に補修し、建築雜誌第四〇〇号に掲載せし者であるが、過日アルスより美術講座の中に之を転載せんことを交渉された。此の稿は多忙の際に成り、意に満たざる所多きにより何時か研究して詳しく論じて見たいと思つてゐた。併し目下多忙にて迎も其の暇がないから已むを得ず多少の訂正を加へて其の需に應ずることとした。内容の疎漏杜撰の點多きは読者の諒察を乞ふ次第である。

とあり、支那内地旅行談(P 816)この本の終りになるが、本編は昭和六年七月二十七日外務省文化事業部に於て講演せられしものの筆記にして、同部より印刷に付して配布せられしものであるが、稍誤り多く真意を伝へて居らぬ所もあるので、編者に於て多少の訂正を加へ、一部内容を削除して茲に収録することとした。

又支那の碑碣に関して、支那碑碣の様式の末尾(P 196)に

支那の建築と藝術

支那の碑碣に関しては最後の病床に於て令息に口授し、文部省主催書道講習會に代誦せしめられし講演の草稿を印刷に付し「支那碑碣形式ノ変遷」と題して知己に頒たれしものがあるが、本書には範圍の広きを採り「書道全集」第二、四、六、八、九、一八、一九の各巻に分ち執筆せられしものを集め、仮に「支那碑碣の様式」と題して載録することとした。

と述べている様に、この本は本人の直接の記述によるものではない。だから、両碑の配置における過ち表示は、關野氏の誤解でないにしても、この様な処に原因があるのかもしれない。(注7)

問題は、これから示す、過った配置表示をした著書のグループが皆日本を代表する有名なものばかりであり、この關野氏の著書がそれらに影響を及ぼしていると感じられる処にある。なぜこの様にして作られたこの著書がこんなに多くの書道出版物の資料となったのかも問題となる。だが単に關野氏の著書が総べて悪いと言っているのではない。關野氏の資料は古く且つ素晴らしい処は多くある。その一つが落書きの写真である。

〈落書きが意味すること〉

資料3に見られる「春? 秦? 王」の落書き部分は資料6には見られない。これは資料6の方が資料3より古い時に写真を撮影していることになる。誰もが一度は足立氏より關野氏の記述が正しいのではと思う点である。仮りに關野氏の記述が正しいとした上では、資料6から資料3への間において両碑の配置替えがあったのではないかと考えても不思議ではない。しかし、嵌めこまれた両碑を見、他の落書き部分が両写真まったく同じであることより、もし仮りに両碑の配置替えがあったとすれば落書き部分はそのままの状態であるわけがなく、破損されるは必定である。よって資料6は資料3より古く撮影されたものであるが、配置

替えは否定される。

現在の一層南門に両碑が定まってより現在まで不動であったとする考え方は至当であろう。

第二節 雁塔聖教序の配置に関する三分類

次に両碑の配置に関する今までの記録や著書研究されたものを管見の範囲で略述して資料としてみたい。

第一款 正しい両碑の配置を示す解説書群

これは西側、序碑。東側、序記碑を示す配置群のことで、この見解を述べている諸氏は実際に両碑の配置を見学して記している。

○長安史蹟の研究二(頁8〜10・13〜15の前記資料を参照)

○西安碑林の解説部分、解説53—56唐、大唐三藏聖教序碑(発行所講談社・発行日昭和41年8月28日)にて、解説部分の著者松井如流氏は

53—56 唐 大唐三藏聖教序碑(雁塔聖教序)

褚遂良書 永徽四年(六五三年) 大慈恩寺大雁塔

二九七×九八・五cm

この碑は、太宗の序と高宗の記と二石であって、大雁塔の南門の左右の龕に嵌められ、向って左の龕には、永徽四年(六五三年) 歲次癸丑十月己卯朔十五日癸巳建中書令臣褚遂良書とある太宗の序碑、題額は隸書で「大唐

三藏聖教之序」と書き、碑文とも右行。一方の右龍には、永徽四年歲次癸丑十二月戊寅朔十日丁亥建尚書右僕射上柱国河南郡開国公臣褚遂良書とある高宗の記碑、題額には篆書で「大唐三藏聖教序記」と書き、碑文とも左行。つまりこれは、左右対照の形式にしたものである。褚遂良の官名のちがうのは太宗の序には、太宗当時の官名、高宗の記には、永徽四年当時の官名を書いたものといわれる。(後略)(松井)

松井如流氏は、昭和33年と昭和36年に中国を旅している。書家としては、中国解放後早期の訪中である。

尚、本書「西安碑林」(編者西川寧)の図版には配置について記していないが、右と左の両頁に渡って縮小された全拓と、原寸大の書き出し部分が記載されている。その記載は右の頁に序碑、左の頁に序記碑であり、松井氏の解説と異なっている。これは編者と解説者の相違からなったものか、図版は単に法帖に示される順位として右から左としたのかは不明である。

○書の旅(発行所二玄社・発行日昭和58年1月20日)にて、著者宇野雪村氏は

慈恩寺と華清池

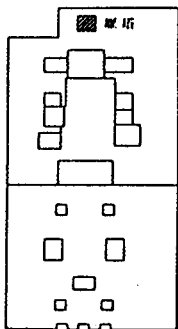
唐の都、長安は、広大な規模のものであったらしい。今の西安の城内は当時の皇宮にあたるというから、その

大きさが偲ばれる。(以下中略)

南面する入口の左右に入口に似た窟を作り、ここに雁塔聖教碑が収めてある。窟の奥行はそう深いとは思わなかったが、前面に木の柵が施してあって中に入れない。西側の窟に太宗撰文の雁塔聖教序碑、東窟に高宗撰文の雁塔聖教序記碑が建てられている。建立当時は最上層にあったのを、再築の際ここに移したものだという。両碑とも上部がやや狭くなっており、雁塔の形に合せたようだ。序碑は右行であるが、記碑は左行になっている。黒大理石だという。石の肌理はよくはわからないが黒光りしている。碑の保存も石質もよいのだろう。刻字がはっきりしている。褚遂良書、万文詔刻などの字がグーッと迫ってくるような気がした。

実測できないのが残念だが、詳しい著録はあるのだからと思うと気が軽くなった。ところが、この序碑と記碑が東西どちらにあるかがはっきりしていないことに気がついた。私など記碑が碑陰の状態だとかつにも考えて

いた。そんなふう
に考えていたのが
おかしいのだが、
記碑の左書からき
ていたのかもしれ
ない。両側に立っ
ていることは何回



慈恩寺配置図

となく読んでいたのだが。改めて関野博士の「支那碑碣の様式」を読んでみた。

初層南面入口の左右に各広さ四尺八寸四分、深さ九尺二寸の小室を設け、其後壁に沿ひて東に聖教序碑、西に聖教序記碑を立て、其前に門扉を設けたのであるが、今は唯臚放石を存するのみである。両碑は形式同大にして黒大理石をもつて作られ、方趺の上に立ち、碑身下広く上狭く、上に釈迦・両羅漢・両菩薩・二天を、下に三天人を高肉刻にあらはし、左右縁に雄麗なる宝相華文を刻し、碑身の上に螭首を冠す、技巧精練、実に初唐碑中の傑作である。碑身広さ底辺に於て三尺三寸、頂辺に於て二尺八寸六分、高さ五尺八寸七分、趺石広さ三尺八寸四分、高さ一尺三寸七分あり。(支那の建築と芸術)

とある。旧版書道全集にもこの文があったと思う。何によつたかは明らかではないが、河出書房の定本書道全集の雁塔聖教序の解説(手島右卿氏)にも東に聖教序、西に聖教序記碑があるとなつてゐる。新版書道全集の解説(内藤乾吉氏)も同様である。

私が見て、メモにとどめたところでは、序が西にあり、記が東にあって、文字は中央から左右に開いていく形に読める配列であることを確認してきたのだが、こうした先人の記録を見ると自分が怪しくなつて、過日西川团长に聞いてみた。西川团长も確かに序が西、記が東にあつ

て在来説と異なつてゐるので、このことが新たに印象に残つたとの話だつたから、この配置はまず間違いない。そうだとすると、序と記の西東逆になつてゐるのは関野博士の思い違いか、或いは後に改められたのかどちらかであろう。恐らく私は関野博士の思い違いであろうと思ふのだが何とも言えない。

当時、初層の入口は南面だけで、東・西・北は土で閉ざされていたというが、今は完全に開けられており、四方どちらからでも出入りできるようになつてゐる。西安の碑林も当時とは配列が全然異なつてゐるくらいであるから、配置替えがなかつたとも言ひ切れない。ともかくこの問題は後日に俟つとして、現在は序碑は西に、記碑は東にあるということだけを確認するにとどめておこう。

(以下略)

と記してゐる。

この宇野氏の資料はかなり具体的に記されてゐる。宇野氏の記述を受けて、鬼頭氏は次のように記してゐる。

○一碑一帖中国碑法帖精華第二十卷 褚遂良雁塔聖教序の
解題(発行所東京書籍・発行日昭和59年4月30日)

解題

鬼頭墨峻

(前略) 向つて右、すなわち東側に述聖記を、向つて

左、西側に聖教序を嵌め込んだ。平凡社刊『書道全集』八巻、中央公論社刊『書道芸術』第三巻では、東側・右に聖教序、西側・左に述聖記があるとされている。一九七五年の第二回中国書道参観団の団員としてこの地を訪れた時のメモでは、右・東側に記、左・西側に序と記録してある。実際に自分で確かめたので間違いはないはずであったが、二冊の本が共に全く逆であるので不安になり、

正しい両碑の配置を示す解説書群

その他の本を見たがそのことにはふれていない。ようやく宇野雪村先生の『書の旅』にあった。その本の中でも諸資料が現在の配置とは逆になっており、御自分の記録が怪しくなった、と書いておられる。なぜこのように逆になったのか、わからないが、宇野先生が書かれているように配置替えがあったのかも知れない。

西安碑林 の解説	長安史蹟の 研究	著書名
松井 如流	足立喜六	著書
昭和41年8月28日	昭和8年12月	発行日
<p>向って左の龕には、永徽四年（六五三年）歳次癸丑十月己卯朔十五日癸巳建中書令臣褚遂良書とある太宗の序碑、題額は隸書で「大唐三蔵聖教之序」と書き、碑文とも右行。</p>	<p>向って左の龕には永徽四年（西紀六六三）十月<small>※印刷ミスであらう</small>中書令臣褚遂良書とある太宗御製の三蔵聖教序碑。</p>	序 碑
<p>一方の右龕には、永徽四年歳次癸丑十二月戊寅朔十日丁亥建尚書右僕射上柱国河南郡開国公臣褚遂良書とある高宗の記碑、題額には篆書で「大唐三蔵聖教序記」と書き、碑文とも左行。向って右、すなわち東側に述聖記を、</p>	<p>右龕には永徽四年癸巳十二月十日に建てた「尚書僕射上柱国河南郡開国公臣褚遂良書」と署した高宗御製の三蔵聖教序記碑が嵌められて居る。</p>	序 記 碑

中國碑法帖 精華第20卷 褚遂良雁塔聖教序 の解題	旅の書
鬼頭 墨峻	宇野 雪村
昭和59年 4月30日	昭和58年 1月20日
向かって左、西側に聖教序を嵌め込んだ。	※くわしくは本文P11、P12を参照。
向かって右、すなわち東側に述聖記を、 ※くわしくは本文P12、P13を参照。	

第二款 現在の配置と異なる見解の解説書群

次に、現在の配置と異なる東側、序碑。西側、序記碑を示す配置群に対する見解を述べてみる。この見解の諸説群は、關野貞氏の著書を資料として記述したか、その記述した著書を基にして記述した解説著書と推察出来る。

關野・足立両氏が訪中していた年代と違い年が過ぎると共に世界の情勢が悪くなり、中国への旅行は困難となった。一九七二年(昭和47年)日中友好条約に関する提携まで両氏の著書が貴重な文献となったことは言うまでもない。特に關野氏は何度も短期の旅行を繰り返しており、旧書道全集での執筆等数多くの解説、論文を残している。従って書

道界ならびに書道出版関係書の執筆家グループに与えた影響が大きかったのは当然である。

その配置群の資料を紹介する。

○支那の建築と芸術(資料5、7の前記資料を参照)

○支那文化史蹟9・中国文化史蹟9(資料の前記資料を参照)

○定本書道全集第6巻(注11)

○書道全集 8・中国 8 唐 II (発行所平凡社・発行日昭和 31 年 1 月 20 日) にて、記事部分における著者内藤乾吉氏は

14-121 雁塔聖教序

褚遂良

永徽四年(六五三)

拓本二四・五×一四・三種

(前略) その際、最下層の南面の門の両側に小室を作り、聖教序碑を東側に、述聖記碑を西側に嵌めこんだのであるということである。(以下略) と記している。

○清雅堂本褚遂良雁塔聖教序(発行所精雅堂・発行日昭和 41 年 7 月 10 日) の解説部分「雁塔聖教序について」にて、著者藤原楚水氏は

雁塔聖教序について

文学博士 藤原楚水

雁塔聖教序は褚遂良の楷書の中でも、特に尤もすぐれた劇蹟である。(中略)

雁塔聖教序は、唐の太宗の聖教の序文と、高宗の記とを併せ刻したものであるから、正しくは序記といふべきであるが、一般に序といひ記はその中に含まれてゐる。題して雁塔といふのは、この序の刻石が陝西省長安の慈

恩寺の雁塔の中にあるからである。即ち雁塔といふのは塔の雅名であり、この塔は唐の永徽中、玄奘法師の造立せしものといはれる。その塔の右の壁には太宗の序文、左の壁には高宗の記を刻した石が嵌めこまれてある。そして序文の方は右方より文を起して左方に向つて順を追うて書し、記は左方より文を起して右方へ向つて書してあり、その文字の大きさも序はやや小さく、記は字体が大きい。(以下略)

と記している。

右・左の言い方は曖昧である。これに東か西かの説明がなければ別であり、又「塔に向つて」の説明もなく「その塔の……」では「塔から見えて」の意にも取れる。私は文字通り太宗の序文を塔に向つて右の壁と理解した。故にこのブロックに収めたのである。

○中国書道史(出版社木耳社・発行日昭和 42 年 3 月 10 日) にて、真田但馬氏は

雁塔聖教序 P192

(前略) 高宗の永徽三年(六五二) 玄奘は西域から将来した経像を火災から守るため、境内に五級の雁塔の建造に着手し、二年の歳月を費して成ったという。その時にこの一室におくために序記が刻されたのであろう。序は永徽四年十月十五日の建、記は同じく十二月十日の建である。のち長安年中に現在の七層の塔に改造し、その最下層の南面の門の両側に小室を作り、東側に序、西

側に記をはめこんだといわれる。(以下略)
と記している。

○書道芸術(出版社中央公論社・発行日昭和55年2月25日)
の第三卷唐太宗、虞世南・歐陽詢、褚遂良にて、記事
部分における著者曰比野文夫氏は

雁塔聖教序 P.210

褚遂良

永徽四年(六五三)

拓本(宋拓)

23・5×14・9 cm

東京国立博物館

(前略)聖教序碑の末には「永徽四年歲次癸丑十月己卯朔十五日癸巳建中書令臣褚遂良書」、述聖記碑の末には「永徽四年歲次癸丑十二月戊寅朔十日丁亥建尚書右僕

射上柱国河南郡開国公臣褚遂良書」と刻されている。前者は向って右から左へ、後者は逆に左から右へ書かれているのは、並べて立てたとき左右対照になるようにしたのである。

この二碑は初め塔の上層に石室を作り、そこに南面して立てられたというが、のち則天武后のとき今日のように七層塔に改築され、その最下層の南面両側に凹みを作って嵌入されることになった。向って右、すなわち東側が聖教序碑、向って左、すなわち西側が述聖記碑である。と記している。(以下略)

○歴代法書萃英(上海書画出版)唐褚遂良雁塔聖教序の簡介(発行所新華書店上海發行所・発行日一九八〇年(昭和55年9月)にて次の資料があるが、本簡介は右記の書物の末部にあり、その部分には解説者の明記はない。

簡 介

「雁塔聖教序」、在今西安市南郊慈恩寺大雁塔。塔門東、西龕各立一石，均建于唐高宗永徽四年(六五三)。東龕内是唐太宗制《大唐三藏聖教序》。正書二十

一行，行四十二字，文左行。額隶书八字。西龕内是唐高宗为太子时所制。大皇帝述三藏圣教序记。正书二十行，行四十字，文右行。額篆书八字。「序」与「记」都是褚遂良书，万文韶刻字。「记」的字比「序」的字稍大。

唐高僧玄奘法师去印度半岛诸国求佛经，历尽艰辛。《圣教序》为纪述此事而作。

褚遂良（五九六——六五八或六五九）字登善，钱塘（今浙江杭州）人，一作阳翟（今河南禹县）人。唐朝杰出书法家。太宗时历任起居郎，谏议大夫。累官至中书令。高宗即位，封河南郡公，任尚书右仆射，世称「褚河南」。其书初学虞、欧，后法右军。正书清远古雅，微杂隶意而自成一家，对后世影响极大。

《雁塔圣教序》是褚书代表作之一。这一拓本墨色沉静，字口清晰；「序」里「威靈」的「靈」字右上角未损，「拯含類于三途」的「類」字「頁」下右点未损，「隻千古而无对」的「千」字横划右上无泐痕，是明时精拓佳本。

○中国の美術②書蹟（編者中田勇次郎氏・発行所淡交社・発行日昭和57年5月24日）の「38雁塔聖教序」にて、杉村

邦彦氏は、

38 雁塔聖教序 褚遂良 唐

拓本 東京国立博物館蔵

（中略）則天武后のとき、七層の塔に改築されたので、その最下層の南面両側に凹みを作って嵌入された。向かって右、すなわち東側に序があり、向かって左、すなわち西側に記がある。（以下略）（杉村）と記している。

○中国法書選雁塔聖教序（発行社二玄社・発行日昭和62年12月10日）にて、角井博氏は

解説（P 57）

（前略）初層南面入口の東に序碑、西に序記碑を嵌入した。雁塔聖教序とは、この二碑を合わせたの呼称である。（以下略）

と記し、同氏は次の

○法書がイド雁塔聖教序（発行社二玄社・発行日昭和62年12月10日）にても、次のように記している。

雁塔聖教序

角井博

唐時代の古都長安、今の陝西省西安市街の南郊に、慈恩寺の大雁塔が高く聳え立っている。その最下層南面入口の東西に、「大唐三蔵聖教之序」、「大唐三蔵聖教序記」の二碑が嵌め込まれているが、雁塔聖教序とは、この二碑を合わせたの呼称である。（中略）

初層南面入口の両側に凹みの龕（小室）を設け、その後壁に沿って、東に聖教序碑、西に聖教序記碑を嵌入したのである。

さて、太宗御製の序、高宗御製の序記は、共に貞観二十二年に成ったが、両碑が作られたのは、五年後の永徽四年（十月十五日・十二月）（後略）

現在の配置と異なる見解の解説書群

支那の建築と藝術 (支那碑碣の様式)	著書名	関野 貞	著者	昭和6年7月27日	発行日	東に聖教序碑	序 碑
						西に聖教序記碑を立て	序 記 碑

中国書道史	西安碑林 の図版	清雅堂本 褚遂良雁塔聖 教碑の解説部分	書道全集8 中国8唐Ⅱの 記事部分	定本 書道全集 第6巻	支那文化史蹟9 (中国文化 史蹟9)
真田 但馬	西川 寧	藤原 楚水	内藤 乾吉	手嶋 右卿	關野 貞
昭和42年3月10日	昭和41年8月28日	昭和41年7月10日	昭和32年1月20日	昭和29年7月20日	昭和14年～16年 (昭和48年10月再版)
東側に序	※図版上の位置がまちがっている。 ※同書で解説を図版の違いを見せている。	その塔の右の壁には太宗の序文、 ※右・左の表示は曖昧なのだが、「向って」の意として、このグループにいられている。	聖教序碑を東側に	東に唐太宗の聖教序碑、	慈恩寺 大雁塔 (1)大唐三蔵聖教序碑 拓本(右) 慈恩寺 大雁塔 (1)大唐三蔵聖教序記碑(左) ※拓本(図版)の位置を示しているようである。
西側に記をはじめこんだといわれる。		左の壁には高宗の記を刻した石が嵌めこまれてある。	述聖記碑を西側に嵌めこんだのであるということである。	西に高宗の聖教序記碑	(2)大唐三蔵聖教序記碑 拓本(左) (2)大唐三蔵聖教序記碑 拓本(左)

法書ガイド 雁塔聖教序	中国法書選 雁塔聖教序	中国の美術② 書蹟の 解説部分	歴代法書萃英 唐褚遂良 雁塔聖教序の簡介	書道芸術 第二巻の記事部分
角井 博	角井 博	杉村 邦彦	解説者明記なし (上海書画出版社)	日比野文夫
1987年12月10日	1987年12月10日	昭和57年5月24日	1980年 昭和55年9月	昭和50年9月20日
東に聖教序碑、	その最下層南面入口の東西に、「大唐三藏聖教之序」、 「大唐三藏聖教序記」の二碑が嵌め込まれているが…	初層南面入口の東に序碑、	東龕内是唐太宗制、 《大唐三藏聖教序》。	向って右、すなわち東側が聖教序碑、
	西に聖教序記碑を嵌入したのである。	西に序記碑を嵌入した。 雁塔聖教序とは、この二碑を合わせたの呼称である。	西龕内是唐高宗为太子时所制 《大唐、皇帝述三藏聖教序記》。	向って左、すなわち西側が述聖記碑である。

第三款 両碑の配置に関して曖昧なる表現の解説書群
次に、両碑の配置についてどちらともつかない表現、曖昧な表現、説明と図示が異なるものの解説群を紹介する。

ここでは次の三著書を紹介したが、両碑を「三藏聖教序」とならべ「左右に嵌入され」と言うときしい配置となるが、普通は「右左」と呼ばず、正しいと言

うより曖昧な言い方で避けた様にもとれる。

それぞれの表現で、その表示における著者の努力がそれぞれに感じてくるのは私一人だけのことではないだろう。

(両碑の配置に関して曖昧なる表現の解説書群)

配置表示においては、どうでもよいと言う問題ではない。正しい配置の表示の上で両碑を見なければ総べてが狂い始めてくる。正しい配置表示の上でこそ雁塔聖教序を論ずることが出来るからである。

著書名	著者	発行日
書苑 第5巻 第10号	瓶 童	1941年10月1日
書跡名品叢刊 唐 褚遂良 雁塔聖教序	前本 菁竹	1959年3月31日
書聖名品選集7 褚遂良 雁塔聖教序	桃山 艸介	1986年5月20日
これ序と記とを以て二碑に分刻し、慈恩寺塔下において東西両龕に分けて之を置けり。 聖教序、今、西安府の南六百里（此里数恐らくは誤あらん、雍州金石志は十五里に作れり、）の慈恩寺塔下にあり。序記、両石に分ち、東西両龕之を覆へり。序は右行にし、記は左行にす。	序と序記との二石に分れている。序は右より左へ行を逐い、序記は左から右へと行を逐って刻されている。つまり、序と序記とは行が逆になっていて、二石を相対させた時、中央から見て同じ方向に行の流れが見えるわけである。	そして塔の南面に太宗の「三藏聖教序」と高宗の「三藏聖教序記」が左右に嵌入されることになりました。

第二章 雁塔聖教序の正しい配置表示よりくる諸問題

正しい両碑の配置表示の上にて考えられる問題について、
ここで記す必要があるだろう。話を進める上において、位

置や方向における順位について考え、高宗皇帝の立地の方
向へと話を進める。

第一節 位置や方向における順位の問題

〔「左右」「東西南北」より考える〕

(注9)の様に、「左右」についての順位は時代によって異なっている。この両碑が書かれ、建てられたのは永徽年間・唐であるから「尚左」で左が優位となる。問題はこの時、皇帝がどの方向を向いてこの両碑を定めたかになる。(注10)の様に「天子南面」がある。左右は時代荷よって異なっているが、「天子南面」は古来変化していない。

皇帝は宮殿において北から南を向いて臣下に会した。資料8の様に宮殿も北に位置し、北から南を向いている。故に北は南より上位となるだろう。

皇帝から見ると左は右より上位であるから、東が西より上位となる。以上をまとめると

○左は右より上位

○北は南より上位

○東は西より上位

となる。

第二節 高宗皇帝が向いた方向

「正しい両碑の配置表示において、高宗皇帝がどちらを向いて両碑を定めたか。」の問題を考えてみる。

問題は、宮殿と同じように高宗皇帝が南面して立ったのか、大雁塔の方に敬意を表して立ったのかとなる。

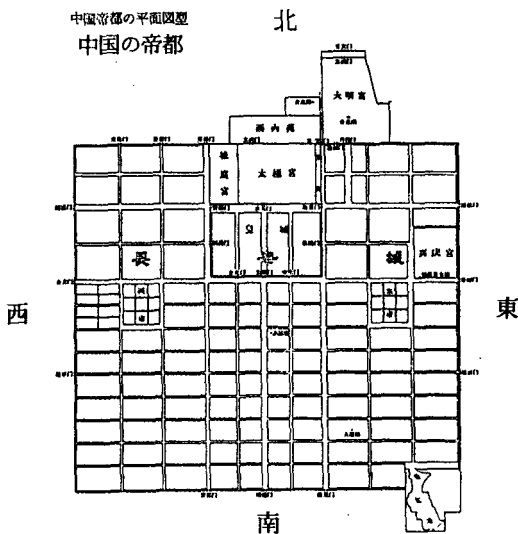
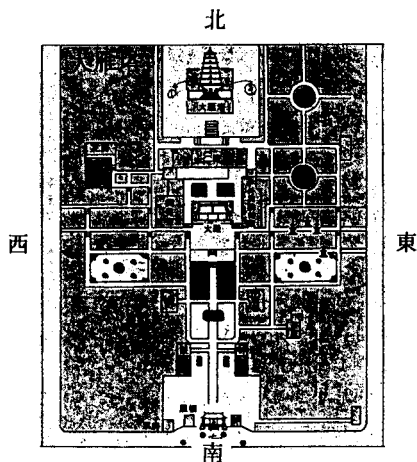


図29 唐・長安城復原図(考古 1963-11-西安唐城發掘圖冊1)

(資料8)

これは、両碑の位置の上位に関係することであり、両皇帝の上位を決することにもなりかねない重大なことである。

資料9の様に大雁塔も南面しているのです、その上にたち次の二つの仮説を立ててみた。仮説(一)、高宗皇帝が大雁塔に向って立つ 仮説(二)、高宗皇帝が宮殿と同じ向



慈恩寺全体から見た大雁塔と
 ①大唐三蔵聖教之序碑 (題額隸書)
 ②大唐三蔵聖教序記碑 (題額篆書)

(資料9)

きに立つのである。
 この二つのどちらが正しいかは、高宗皇帝の大雁塔に対する感情や思いの内容によって定まるであろう。感情の内容にたち入って論を進めることは若干危険であるが、述べてみたい。

仮説(一)

高宗皇帝が大雁塔に向って立つとしてみた場合、高宗皇帝が亡き母文徳皇后の追福と三蔵法師の業績を称える大雁

塔に敬意を表して、大雁塔に向って立つこととなる。

大雁塔に向って立つと方向は南から北に向って両碑を定めたこととなり、左が上位となるから両碑の上位は西側の「序碑」となる。上位にあたる左に亡き父太宗の作った文「序碑」を建て、次に高宗自らが作った文「序記碑」を右に建てた。

皇帝は父太宗に尚敬意を表し「序碑」は通常の碑型をとり、行の移行も碑文・題額共に右から左へと進めた。対して「序記碑」は逆の碑型をとり、行の移行を碑文・題額共に左から右へと進めた。ただ高宗皇帝が総べて下位にくだることはいかず、常に父太宗を上位に据えながらも両皇帝の比重を保つため、題額の書体において「序碑」を隸書、「序記碑」を篆書とした。この篆書額も碑同様に行を逆行することにより、あくまでも太宗上位の形は崩さなかった。

仮説(二)

高宗皇帝が大雁塔を背に宮殿と同じ向き(北から南へ)に向って立つとしてみた場合、親に対する敬意より、大雁塔を背にして自分の権力の象徴として大雁塔をとらえ、両碑を建てたことになる。大雁塔は宮殿と同じ役割りをすることとなる。

この場合、両碑の上位は左にあたる東側の「序記碑」となる。「序記碑」は「左右」「東西南北」の両関係でも

上位を務めることとなる。

父太宗の亡き後、高宗皇帝として太宗より上位を主張する意志が前面に強く出てくる。現皇帝と亡き皇帝の上位に關する論議が急浮上する。兩碑の配置において、皇帝と皇帝をとりまく臣下たちの苦勞が感じられてくる。表立った上位關係の論議にならぬ様、そして現皇帝を軽んずることがない事、これを一番として生まれた資料1の兩碑の配置、上位入り混じる苦肉之策。これが、太宗の通常の碑型に対して、碑文・題額共に左から右へと移行させる新しい碑型とさせた。又、題額も篆書を使用した。

仮説(一)(二)のまとめ

以上正しい兩碑の配置の上で二つの仮説を建てて高宗が大雁塔に向つてどのように立つたかを考えてみた。

太宗の決断によって、兄を退け李治(太宗第九子)が皇太子となり、太宗の次の皇帝高宗となつた経緯から見て仮説(一)は時期早しだろう。もし仮説(二)が成立する時と言へば、褚遂良が左遷される頃だろう。そうなると、揮毫者褚遂良の雁塔聖教序自体の存在がなくなつてしまふ。

しかし、過つた兩碑の配置の上ではこの仮説(二)的思考の要因が強く、仮説(一)を正とすると過つた兩碑の配置が正統性をおびてくる。又、現在出版されている雁塔聖教序の拓本の本や原拓の本の順序も訂正しなくてはならなくなる。

正しい兩碑の配置においては仮説(一)の正統性は強いだろう。位置や方向における順位の問題が雁塔聖教序にとって重要なことが理解される。

第三節 碑面の上において見られる問題

位置や方向における順位は、「左右」「東西南北」「高宗が立つ位置」によって変化することを示して来た。このことは雁塔聖教序の碑面(文章の展開や、文字の表現)においてもかわつてくる。

その一つが次に示す石碑を揮毫した褚遂良の名前の位置である。正しい兩碑の配置表示の確認も含めて話を進める。

第一款 褚遂良の名前が位置する問題

資料1に示した正しい兩碑の配置から兩碑の褚遂良の名前の位置と、序記碑に記されている碑文の刻者萬文韶の名前の位置を見ることにする。

西の序碑においては文が右から左へと移行しているので、序碑の左隅に褚遂良の名前は位置する。東の序記碑においては文が左から右に移行しているので、序記碑の右隅に褚遂良の名前は位置し、その下に刻者萬文韶の名前が記されている。

この上から見て、褚遂良の名前が兩碑にあり、萬文韶の名前が一碑にあることが気になる。資料1を見ると褚遂良の名前の上にある日付けと役職名の異なりに注目しなければ

ばならない。日付けは両碑の揮毫順序を意味し、役職名は両皇帝に使えた時の褚遂良の地位であり、褚遂良の二つの名前前は同一人物だが、別の存在であることを意味している。それに対して萬文韶の名前は一碑のみ序記碑にある。これは序碑を刻って次に序記碑を刻ったことを意味し碑を刻した順序を意味している。

この褚遂良の二つの名前と萬文韶の名前はまさしく太宗から高宗への時の移行を示し、序碑から序記碑への移行をも示している。

もし仮りに、資料2の配置が正しいと前提すると資料1では気にならなかつた褚遂良と萬文韶の名前の位置そのものが気になってくる。資料2では二人の名前が最も中央の南門に近い場所となる。碑文の始まりが両碑共に端となり中央にある南門から遠ざかる。この様になると両皇帝の立場とか、高宗と褚遂良の立場の問題から離れて太宗皇帝と褚遂良との問題へと話が変わる。褚遂良の行動として考えられない結果となっていく。

故に正しい両碑の配置でないと総べてが狂って来る。このことよって揮毫の順序が序碑から序記碑に移っていることは明確であり、両碑を配置するうえにおける高宗皇帝の立つ位置は「大雁塔に向かう」の証ともなってくる。

第二款 両碑の文字の大きさの問題

もう一つが、両碑の碑面に書かれた文字の大きさである。

序碑と序記碑の文の移行の違いが、この両碑の文字の大きさに大きく関係している。

序碑は、文の行の移行が右から左であるから揮毫に関して書き手の左側が常に空間となる。書き手を置く処を含めて右側に文字が存在する。先に不安を持ち、後に気を使う状態で文字を書きつづけることとなる。褚遂良は常に文字構成に終始緊張感を漂わせ揮毫したのであろう。碑面一杯に文字が埋まっており気の使い方は尋常ではなかつたであろう。

序記碑は、文の行の移行が左から右であるから、揮毫に關しては書き手の左側に文字が出現し常に文字が存在する。書き手の右側に空間がある。手を置く処に空間があるから気分も大きくなる。のびのびと書きあげていく。碑面に手をつけて書かねば、枕腕では左手が邪魔となる。自分の書いた文字も自然に見えるためか、揮毫中の不安は感じられないほど自由に書いている。文字が碑面一杯に埋まってしまう空間が目立つ程文字は少ない。そのためか序碑より一まわり文字が大きく見える。褚遂良の揮毫において序碑から序記碑への流れは理解出来るが、心理的にみて序記碑から序碑への揮毫は考えられない。両碑の揮毫順序は序碑、序記碑と見られる。気の使い方等見て、序碑に対する上位意識は確実となる。

正しい両碑の配置において、高宗が太宗皇帝を大切にしていたことを推察することの出来る材料となる。

この事は高宗と太宗の關係を調査するうえで大切な要因となる。即天武后によって變化する高宗の心理の變化における研究においても重要な点となる。

まとめ

この問題の発端は序章で述べた様に、中国に渡って實際に現物を見た処からはじまる。現在刊行されている多くの解説書の類は過った兩碑の配置表示をそのまま踏襲しているという現実がある。その現実を目の当りに見るこの時この問題の深さを思うのである。

現在刊行されている書道の解説書のこの兩碑の配置に関する記載は「①正しい配置を示したもの。②過った配置を示したものの。③曖昧な配置を示したものの。」の三つに分類された。特に②の源流を尋ねてみると、古く關野貞氏の記載された著書へと逢着する。過ちの切っ掛けは關野貞氏の講演録を外務省の文か事業部の手によって筆記され、昭和六年七月二十七日に印刷された一冊の本となる。

いまある過った兩碑の配置表示の著書の類は皆つまる処關野氏の説をそのまま踏襲して今日におよんでいる。勿論途次世界情勢の悪化によって日中の国交が断絶するといつた不如意な時代のあったことも一因となっているだろう。

小論は単に過ちの兩碑の配置表示をした人々を責めているのではない。

書を研究する私たちがその真理を追求する姿勢に対して、

ただ座視するのではなく我々が自戒の念を持つことと、事実認識の重さを自らに教えるためである。

これは解説や執筆の依頼を受ける者がもって銘すべきことであらう。

(注1) 一九九〇年(平成二年)七月十月十九日別府大学の姉妹校である復旦大学(上海)にて書の歴史的研究を行なった。その研修での旅行中、西安・大雁塔(慈恩寺)で雁塔聖教序を見学した。その時の兩碑の配置は、「西側・序碑。東側・序記碑。」であった。

(注2) 電話は別府大学講師群英氏に依頼して、西安の大雁塔(電)西安七一四四六。平成三年十一月一日(金)16時半のことである。

(注3) 西安訪問ノートとは、過去(昭和53・55・57・61)そして今回の平成二年)五回において記した私のノートのことである。

(注4) 長安史蹟の研究(足立喜六著)

第十章 現存せる唐代の仏寺

第一 大慈恩寺

一 大慈恩寺の縁起

大慈恩寺は隨の無漏寺で、唐の武徳年間に既に廢頽して居たのを、貞觀二十二年(西紀六四七)高宗がまだ皇太子

の時に、其の母文徳皇后の報恩の為に此の寺を再興して大慈恩寺と称したのである。此の寺は大明宮の直南に当るので、高宗は朝夕に含元殿から之を望んで遙拝した。是より先き貞観十九年（西紀六四五）に、僧玄奘は印度から帰って弘福寺で専ら経論を翻訳して居たが、高宗は大慈恩寺内に新しく翻譯院を建てて鄭重な礼義を備へて玄奘を慈恩の上座に迎えた。是より玄奘は慈恩大師と尊称せられたのである。

二 慈恩寺等の建立

三 大雁塔の縁起一略一

四 大雁塔上の遊覧一略一

五 大雁塔の重修一略一略一

六 弥勒菩薩の石像一略一

七 大雁塔楯石の陰刻画一略一

八 聖教序碑及び同序記碑

九 碑林にある三藏聖教序並に序記碑

（集王聖教序について）

聖教序及序碑は貞観二十二年（西紀六四八）玄奘が弘福寺より慈恩上座となった時に、太宗並に皇太子に上表して、翻譯經全部の総序を賜らんことを請うたが、其の請は直に許されて、太宗は序文に答勅を添へ、皇太子は序記に賤答を添えて賜わったもので、玄奘は深く之を光榮として、再謝序表を上った。此の時弘福寺の座主円定も之を右に刻せんことを請うて晉許を得たので、其の寺僧懷仁が王羲之書

を集め、其の文字を選んで聖教序並序記と勅答賤答を記し、なほ般若波羅密多心經を載せて碑に刻した。実に咸亨三年（西紀六七二）十月の建立である。此の碑は現に西安城内の碑林に保存せられてある。碑文の高さ七尺、幅三尺一寸あって、碑冠及び其の下七仏の彫刻の精巧なること、碑側の模様の雄偉なることは驚嘆に値する。常時王羲之の真跡を蒐集することが流行したが、此の碑が最もよく羲之の真跡を集録したものととして藝林の稱賛を博して居た。

十 同州府にある褚遂良書聖教序及序記碑

此の碑は聖教序並序記の本文だけを一碑に刻したもので龍朔三年歲次癸亥六月癸未朔廿三日乙巳建、大唐褚遂良書と記してある。文字は頗る遒健で、石墨鐫華卷二には「（慈恩本）似不及同州本」とか「（同州本）似勝慈恩本」とさへ論じて居る。併し詳細に両碑を比較する時は同一人の筆蹟だと首肯することが出来ぬ。書札並に碑の構造が大雁塔の同碑に劣ること萬々で、到底比較になつたものではない。尚ほ褚遂良は永徽元年（西紀六五〇）の同州刺史に贬せられた事はあるが、一年の後ち召還せられて顯慶三年（西紀六五八）に愛州で客死した故に、龍朔三年（南紀六六三）は褚遂良の死後五年を経過して居る。それで其の真跡でない事は明瞭である。前二碑は直接慈恩寺に関係はないが、慈恩寺の聖教序及序記碑と間接に関係もあり、且はこの二碑とも関中伝存の唐碑として著聞して居るから、此の処に附記したのである。

十一 大雁塔年表

貞觀十年（西紀六三六）文德皇后崩じ、昭陵に葬る。

（略）

貞觀二十二年

皇太子文德皇后のために大慈恩寺を建つ。
褚遂良中書令となる、太宗玄奘の為に聖教

序を作り、皇太子聖教序記を作る。

貞觀二十三年

（略）

永徽四年

十月聖教序碑、十二月聖教序記碑を慈恩寺
塔内に建つ。

顯慶三年

（略）

（注5）

この写真を見てわかる様に碑はこの時も完全に埋
めこまれている。序記碑の左に春？秦？王の落書
きがないことに注目しておいて下さい。

（注6）小引

著者は明治三十九年一月より同四十三年二月に至
るまで支那西安府陝西高等学堂に教鞭を執る傍ら、

漢唐の墓都長安の規模・遺構の研究に志し、一
面文献の考究を試みるとともに、広く実地踏査に
基づいて故蹟・遺趾の測定を行った。

（以上略）（長安史蹟の研究・P9小引より）

（注7）次の本の背と、凡例の始めに關野氏の名前が入り、

しかも論文集よりとあり、關野氏の責任はいか

なる理由があっても免れないだろう。



凡例

本巻は關野博士論文集全四巻中の第四巻をなすもの
である。

本巻は支那の建築と藝術と題するも、印度の建築と
藝術に關する著作も便宜上本巻中に収録した。

一 論文にして支那及び朝鮮に亙る者に就いては、其
の内容が支那を主體とする限り之を本巻に収録した。

例へば、「支那の瓦及び埴」「封泥」等の如くである。
一 巻頭圖版は著者の発見にかかる者、又は特に著者に
關係の深かつた物件の内の代表的な者に就き、著者

の寫生圖及び主として著者撮影の寫眞を似て編纂し
た。

一 附圖「調査旅行行程圖」は著者自筆の略圖及び日記
等により新たに編纂する所の者であるが、尚ほ、多
少の誤無きを保し難い。又、旅行年月日、方向指示
等は一切省略に従ひ、単に経路を示すに止める事に
した。

一 其他一般の編纂方針に關しては悉く第一巻凡例の示

す所に従ふ。

一 本巻は編纂擔當者竹島が編纂中出出征したので、爾後藤島が之を引き継いだ者である。

昭和十三年七月

編纂委員識

(注8) これは中国語の爲、別府大学講師群英氏に訳していただいたので(注)として加える。

《雁塔聖教序》 いまは西安市の南の郊外にある慈恩寺大雁塔にある。塔の門の東西の仏龕に一つずつ石が立てられている、いずれも唐高宗永徽四年(六五三)に立てられたのだ。東の仏龕にあるのは唐太宗が書かれた《大唐三藏聖教序》である。本文は21行で、一行は四十二字で、文は左からである。額の八字は隸書で書いた。西の仏龕にあるのは唐高宗が太子の時書かれた《大唐皇帝述三藏聖教序記》である。本文は20行、一行は四十字、文は右からである。額の八字は篆書で書いた。『序』と『記』はいずれも褚遂良が書かれたのである。字を刻んだのは万文韶という方である。『記』の字は『序』の字よりちよつと大きい。

唐の高僧玄奘法師がインド半島の諸國へ仏教の經典を求めに行くため、辛苦艱難をなめ尽くした。《聖教序》はそのことを述べるため書かれたのである。

褚遂良(五九六一六五八或六五九)、字は登善、錢漣(いまの杭州)人、また、阳翟人と言われている。唐朝

の優れた書道家である。太宗の時、起居郎、凍護大夫にずっと任じた。また、累官、中書令にも任じた。高宗が即位してから河南郡公に封じされた。尚書右仆射に任じされた。世の中に『褚河南』と称じされる。その書道は最初は虞欧に教わり、後は右軍に教わる。本文は澄んで古めかしくて優雅で、少し隸書の書き方を混ぜて、自ら一派をなす。後世に極大な影響を与えた。

《雁塔聖教序》は褚の代表作品の一つである。この拓本は墨の色が落ち着いて、筆画が明晰である。『序』の中の『威靈』の『靈』という字の右上角は傷がない。『拯含類十三途』の『類』という字の『頁』の右下点は傷がない。『雙千古而无对』の『千』という字の横画の右上は刻いだ跡がない。これは明朝の上質な拓本である。

(注9)

「大漢和辞典」の「左(四卷 頁)

工部 (二畫) 左

(8720..520) — (8720..534)

〔尚、左尚、右〕
或は左をたつとび、或は右をたつとび、左右何れをたつとしたかは時代によつて異なり、古來之を驗する者多く、宋の戴埴の鳳樓に左右、清の左原の三餘樓筆に左右、錢大昕の十駕齋養新錄に左右、凌揚藻の意旨編に古以右爲左、虞兆逢の天香樓偶得に與、左與、右などの諸篇がある。今、趙翼の陔餘叢考に依り歴代の制を示せば次の如くである。

(注11)

○定本書道全集(発行所 河出書房・発行日昭和29年7月20日)にて記事部分に手嶋右卿氏は

褚遂良 雁塔聖教序(89—96)

この三藏聖教序碑及び序記碑は陝西省長安府南の慈恩寺大雁塔内に立っている。大雁塔は改築せられたものだが、七層の塔塔で、初層南入口の左右に、各廣さ四尺八寸四分(一四六センチ)深さ九尺二寸(二七八・七)の小室を設け、その後壁に沿うて東に唐太宗の聖教序碑、西に高宗の聖教序記碑が立っている。兩碑は同形同大で黒の大理石で作られ、方趺の上に立っている、碑身の廣さは底邊三尺三寸(九九・九)、頂邊二尺八寸六分(八六・六)、高さ五尺八寸七分(一七七・八)である。碑文は聖教序は右より、序記は左より讀むように刻されている。當初は石室内に兩碑左右に並び立っていたものである。

書は褚遂良五十八歳のもので、彼一代の傑作とされるばかりでなく、古今の楷法に一格を創始したとさえ云われている。萬文韶の刻字で頗る精巧を極め、褚遂良の縦横自在の用筆は、肉書を見るが如く遺憾なく現われている。古人はこの書を「滑勁絶倫天馬の空を驅けるが如し」とか、「煙の晴空に、鳥が如し」とか、「劍器を舞するが如し」などと評してその超妙の筆と、窮りない變化の美を稱している。疎瘦勁練の線條

三代	朝宮	燕、凶、事、兵、事	尚、右
戰國			尚、右(軍中尚、左)
秦			尚、右
兩漢			尚、右
六朝	朝宮		尚、左
唐	燕、凶		尚、右
宋			尚、左
元			尚、右
明			尚、左
清			尚、左

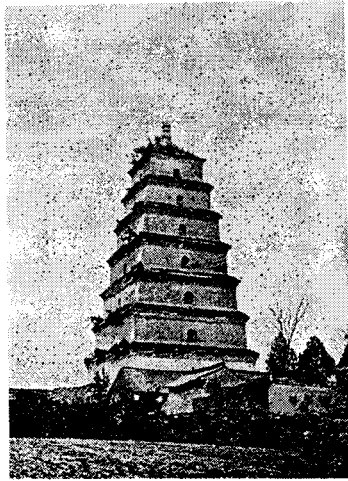
(注10)

「大漢和辞典」 「南」(二卷 頁)

〔南面〕^{シテ} ●南に面する。南に向つて位置する。南階。南は陽、陽に向ふは人君の位。君は南面し、臣は北面する。故に又、單に人君をいふ。南面而聽天下を見よ。(左氏、襄、二十六)鄭於是不敢南面。(論語、雍也)子曰、雍也可使南面。(集注)南面者、人君聽治之位、(論語、衛靈公)無爲而治者其母也與、夫何爲哉、恭己正南面而已矣。(莊子、齊物論)昔者、堯問於舜曰、我欲伐宗、脣、胥敖、南面而不釋然、其故何也、(疏)南面、君位也。(漢書、谷永傳)王莽之稱紀、南面之號務。●遠の官名。漢人の州縣の祖。軍馬のことを掌る。(遠史、百官志)遠國官制、分北南院、北面治、官稱都族屬國之政、南面治、漢人州縣祖、軍馬之事、因俗而治、得其實矣。●韓非子の篇名。

※周知の如く、辞書類は資料とならぬが、ここではあえて「大漢和辞典」を引用し資料とした。

の中に旺盛な創意を織ったもので、一點一畫を經意計畫の上に構成している。篆、隸、行、草の氣持を筆意の中に藏してゐる。手指の參用陰陽俯仰の法など懸寫の限りを盡して、翻々として鋒芒の開闔を行い、多端の變化を必然的な表現にくつきりと盛り上げたものである。表現的には人工の極地とも思われる程で、複雑微妙の線性から發する快いリズムは、音感と化して高く低く迫って来る。皇帝の製文だけに、如何に遂良が力を凝らしたか、察するに餘りあるものがある。



慈恩寺大雁塔 (陝西長安)

立碑の永徽四年(六五)遂良は官右僕射であったが、序文の方には中書令の官名を用いている。この製文は序記共に貞觀二十二年(六四)八月になされたものであるから、序の方へは當時在官の中書令名を記したものであろう。信任の厚かった太宗に對する忠節至誠の情がしのばれる。(手島右卿)

と記している。

この文はあきらかに關野氏の著書を参考にしてゐる。文中の慈恩寺の写真と中國文化史蹟9の50ページと支那の建築と藝術の244ページ慈恩寺の写真とは角度といい同じものである。ただ一つ疑問になるのは關野氏の本より定本書道全集の方が写真そのものの大きさに於いて上の「空」の部分の広さ、右側の「木」の撮影部分が少し広い。

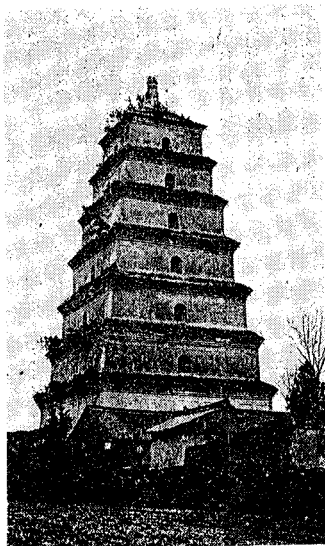
旧本の關野氏の著書を現段階では見ることが出来ず、この本が旧本によって用いられたものか、關野氏の他の写真によったかはわからない。

その疑問が未解決のために、この注にてとどめることにした。

左の写真 慈恩寺は關野氏の「支那の建築と藝術」のものである。

支那の建築と藝術

二四四



第110 慈恩寺大雁塔